

A Connecticut Yankee in King Arthur's Court —Hank Morgan の「聖杯探求」—

那 須 頼 雅

A Connecticut Yankee を出すに当って、作者 Mark Twain は、“I'm not writing for those who miscall themselves critics, and I don't care to have them paw the book at all.”¹ と述べ、世の批評家ならざる批評家の容喙を嫌った。これは、もちろん、余りにも一面的、一方的な見方がはびこり²、作者の真意を無視したり、歪曲したりすることに対する反撥である。しかし、それにも拘らず、ある批評家は、この小説を風刺作品としてのみ論じたし、また、他のものは、作品としてよりはむしろ、作家の方に関心を寄せ、伝記的観点に固執しつづけた。Twain は、こういった偏向性の著しい批評の出現を予期していたかのように、*A Connecticut Yankee* の前数章だけを書き終えた段階にあった1886年11月16日に、Mrs. Fairbanks 宛てに手紙を出し、その中で、この小説の性格に触れて次のように書いた。

The story isn't a satire peculiarly, it is more especially a contrast. It merely exhibits under high lights, the daily life of the (imaginary Arthurian) time & that of today; & necessarily the bringing them into this immediate juxtaposition emphasizes the salients of both.³

この一見単純に見える内容に、深長な意味が副えられている。ここの“not a satire peculiarly”, “more especially a contrast” なる表現は、この小説の基本的性格を明らかにすると同時に、この小説についての偏向した批評をたしなめる警告でもある。すなわち、satire の視点は専ら作家側にあつて一方的、独断的なものであるが、contrast の視点は読者側にあり、あらゆる

る角度に据えられる。satire の対象は、作家以外の「他」に限られるが、contrast の対象は、当然二つである。そして Twain の場合、それは、「自」と「他」である。従って、Twain のこと言う「この物語は satire というよりはむしろ、contrast だ」の含意は、こうである。この小説は、現代に基づいて中世を批判するとか、逆に中世を拠り所に現代を風刺するとかのいずれでもない。この作品での Twain の意図は、中世と現代のいずれが正しい、いずれが後進的である、いずれが理想に近い、とかいった直線の評価を極力避けて、あくまで、両時代の salients を可視的レベルにのせ、読者に鮮明に印象づけようというものである。現代だけとか、中世だけでは、余りにも漠とし、混屯としていて、掴みにくいために、それぞれと「対のもの」を選び、それら両時代を併置することによって、明確に時代の salients を際立たせようとするものである。しかし、ここで注意しなければならないのは、これら両時代をただ並べてみることだけが Twain の意図ではなく、真に Twain が目指すものは、これら二つの時代の総合よりも高い次元のものの発見である。

さて、この contrast の設定のために、Twain は、time は19世紀から6世紀へ、space はアメリカから英国へ、という両次元にわたる mysterious な旅を用いた。Twain の世界においては、旅は挑戦である。旅は頑迷、矛盾、不正をあばき、匡正する力をもつ⁴。人間はすべて“prisoner”である。Time と space に縛られ、その行動領域は限られ、その肉体的能力はとるに足らない。それでも、真に生きる人間は、この“prisoner”の境涯に挑戦して旅に出る。*The Innocents Abroad, Roughing It* の“I”, *Huckleberry Finn* のHuck、そして、この *A Connecticut Yankee* のHank等の旅は、いずれも、この挑戦の旅である。ただ、前のHuck等の旅とHankの旅とは、その雰囲気面で、かなりの距りがある。前の場合、それが明るい、開かれた、出口ある旅であるのに対して、後のHankの旅は、暗い、閉ざされた、出口なき旅である。前のがhumorousなadventuresになっているのに対して、後の *A Connecticut Yankee* の旅はpilgrimageといえる。怠惰、無責

任、無目的をモットーに生きる Huck 等と異なり、Hank は、ひたむきなにかを求めて止まない pilgrim だと言えるのである。Hank は Huck 等と違って未来世界や“Territory”へ逃避するという安易な道を探ろうとしない。あくまで人間が経た歴史の世界、築きあげた経験世界から外へはみださない範囲内で求道に精出す pilgrimこそ、Hank の真の姿である。

1

Twain の場合、どの作品についても言えることだが、「書き出し」が極めて重要である⁵。*A Connecticut Yankee* についても同様で、その正しい理解への鍵は、“A Word of Explanation”なる導入部の中に収まっている。それだけに多少詳しくたどってみる必要がある。この導入部は、作者 Twain と“a curious stranger”の Hank との最初の出合いに始まる。場所は英国の Warwick Castle、天候は険悪で、嵐模様である。作者 Twain は、Hank の物静かで快い物語の流れにいつの間にかのせられて、次第に魅了され、現世から中世の幻想世界へと吸いこまれてゆく。城の案内人が Warwick Castle に陳列され、見るからに「古めかしい中世の鎖かたびら」(ancient hauberk)について説明する。その「鎖かたびら」は六世紀英国の Arthur 王に仕える「円卓」の騎士のひとり、Sir Sagamore le Desirous の所有であったこと、そして、その左胸にあいた丸い穴は銃火器による弾痕らしいことなどを話す。それを聞いた stranger の Hank は、古めかしい微笑をうかべ、古めかしい言葉を用いて、“Wit ye well, I saw it done” (18)⁶と独りで呟き、少し間をおいて、“I did it myself.” (18) とつづける。この言葉を聞くと、作者 Twain は仰天し、同時に、すっかり Hank を信用するようになる。

さて、ここまで「鎖かたびら」の話をたどってくると、必ず浮んでくる疑問は、この「古めかしい中世の鎖かたびら」と、その「左胸にあいた穴」とは一体何を意味するものだろうかという疑問である。その答は実に明瞭であ

る。それは、「円卓」の騎士 Sir Sagamore le Desirous とアメリカのヤンキー Hank Morgan との contrast を示すものである。「鎖かたびら」を唯一絶対と信頼し、全存在を託して死滅する中世の騎士と、「鎖かたびら」を軽くみて、その心臓部に銃弾をうちこみ、Sir Sagamore を仕とめる現代アメリカのヤンキーという contrast である。この「鎧」への崇拜と、「鎧」への挑戦という contrast は、この小説を支える最も基本的な contrast で、夢と現実、子供と大人、迷信と理性、幽囚と自由、従順と反逆という contrast を次ぎ次ぎにこの小説世界の中へ展開してゆく源である。Twain がこの小説の台本として Thomas Malory の *Morte d'Arthur* を用いた⁷⁾のも、この基本的 contrast への Twain の着目の故であると考えられる。

Thomas Malory の *Morte d'Arthur* は、Arthur 王、「湖の騎士」Lancelot を始めとする「円卓」の騎士達の勇敢なる武勲を記すと共に、彼等の内部崩壊にもふれる中世伝説である。それは、同じようなエピソードが連鎖的につづく単調さの中に、実に大胆な「生きた人間」の描写が介在して、読む人を驚かせ、楽しませる。つまり、そこに明白なパタンがある。Arthur 王を始め、「円卓」の騎士達は、The Roman Catholic Church に対しては全くひたむきな尊敬と献身を捧げながら、その反面、The Church の律令に背き反逆するという二面性をもっている。たとえば、Arthur 王の父、Uther 王は、美しい人妻 Igraine に恋心を抱き、山海の珍味をふるまうなどして誘惑の手を差しのべるが、貞節な Igraine はその求愛をはねつける。そこで、Uther 王は相手に容れられないと知るや、大軍を率いて攻めたて、その夫を殺害し、遂に策を弄して Igraine と関係を結び、おもいをとげる。これが、Arthur 王誕生の経緯である。この邪恋の落し子 Arthur 王はまたその淫乱の血をうけつぎ、実の姉 Lot 王妃と結ばれ、Modred をもうける。Modred はさらにまた、同じ因縁の糸にあやつられ、不行跡の限りを尽し、父 Arthur 王に戦さをしかけた上に、Arthur 王の王妃 Guenever に結婚をせまる。王妃がその非道な結婚を承知しないと知るや、王妃の籠る

ロンドン塔を包囲し攻撃する。この余りといえは余りな所業を見るに見かね、司教が強く戒め、もし従わなければ破門にすると言い渡す。それにも耳をかそうとせず Modred は公然と反抗し、その司教の殺害を図る。こうして忌まわしい戦いの火蓋はきられ、あげくは Modred と Arthur 王とは相討ちして果てる。この乱業は王家だけに限られない。Galahad をのぞけば全部の騎士に同じような愛欲の縛れが生じている。なかでも、Launcelot は Arthur 王に対して比類ない忠誠をはげみながら、反面において、その主君の王妃 Guenever に対して愛慕の念を燃やしつづける。その果ては、この道ならぬ二人の間柄を王に密告する者がいて、Launcelot はこともあろうに主君 Arthur 王に刃を向けなければならない派目におちいる。

このように、この伝説をたどってくると、この *Morte d'Arthur* の性格⁸ は、だれの目にもはっきりとしてくる。つまり、これは、騎士道にこり固った気高い勇武な騎士と、性本能をむき出しにした「生」の人間とが同居する伝説である。これは、「騎士道への忠誠」(loyalty to chivalry) と「騎士道への不忠誠」(disloyalty to chivalry) のcontrast、一口に言えば、「遵法の騎士」と「反逆の人間」とのcontrast である。この contrast は、先の「鎖かたびら」の弾痕にみられた Sir Sagramore の reverence と Hank の irreverence の contrast とほとんど同質のものである。つまり、この両方共、美化されてきた中世騎士に対して再評価を求めるものである。Twain は、この contrast にとり憑かれたために、Malory の *Morte d'Arthur* を彼なりに焼き直し、“a new *Morte d'Arthur*” として *A Connecticut Yankee* の創作を思いついたと推測される。言い替えれば、Twain は、この中世伝説を“parody” として利用したのではなく、それを元にして発展させる目的での“core” として用いたと考えられる。

2

さて、先の“A Word of Explanation”の「中世の鎖かたびら」によって

表わされた鎧崇拜と鎧破壊の contrast は、本論に入ると、Hank の眼をかり、Hank の行動を通じて、明らかにされ、補捉されてゆく。“practical”で、“nearly barren of sentiment”の特徴をもつ Hank には、Arthur 王治下の中世英国の実態を適確に把握できる能力がそなわっている。

13世紀の夢の旅の後、目覚める Hank の前に大きくたちふさがるのは、全身鎧に包まれた一人の騎士である。

When I came to again, I was sitting under an oak tree, on the grass, with a whole beautiful and broad country landscape all to myself—nearly. Not entirely; for there was a fellow on a horse, looking down at me—a fellow fresh out of a picture-book. He was in old-time iron armour from head to heel, with a helmet on his head the shape of a nailkeg with slits in it; and he had a shield, and a sword, and a prodigious spear; and his horse had armour on, too, and a steel horn projecting from his forehead, and gorgeous red and green silk trappings that hang down all around him like a bed-quilt, nearly to the ground. (21)

ここで誰れの目にも明らかなのは、余りにも仰々しく、けばけばした「鎧」の武者は、周囲にひろがる “A whole beautiful and broad country landscape” にそぐわず、ぼつんと不自然なまでに人目にたつ、グロテスクな存在である。この著しい不調和、不自然性を Twain は “A fellow fresh out of a picturebook” の表現を用いることによって強調している。しかし、「鎧」の騎士とは全く「対の存在」が、その次に Hank を待ちうけている。

... a fair slip of a girl, about ten years old, with a cataract of golden hair streaming down over her shoulders, came along. Around her head she wore a hoop of flame-red poppies. It was as sweet an

outfit as ever I saw, what there was of it. She walked indolently along, with a mind at rest, its peace reflected in her innocent face.

(27)

「真赤なひなげしの花輪」だけ着けただけの殆んど全裸の乙女とは、まさに nature⁹ の化身である。そのあどけない顔付き、心の安らぎ、ゆったりとした歩きぶりは、前の鎧の騎士の “iron-clad fool” ぶりとは全く対照的である。

この「裸」と「鎧」という外面的 contrast 以上に Hank を印象づけるのは、そこに明瞭に見られる精神面での contrast である。裸の乙女は、鎧の騎士には目もくれない。この態度は、Hank がその鎧の騎士を “iron-clad fool” とか “circus man” とか言って揶揄するが、それ以上に酷しい、冷淡な態度である。“She was going by as indifferently as she might have gone by a couple of cows”. (28-29) この騎士を騎士として敬わず、“a couple of cows” ぐらいにしか見ない乙女の態度は、明らかに「鎧」蔑視のそれである。ところが、鎧の騎士 Sir Kay は、別の意味で、この裸の乙女に無関心である。つまり、この騎士は Hank と異なり、“her own merits” を目の前にして尚、感情のどよめきを示さない。それほどまでに、騎士は本然の性感覚を損ない、男性として奇形化していることを読者に教えている。この精神的な正常と異常の contrast は、見慣れぬアメリカのヤンキー姿そのままの Hank に対する場合もまた同じである。裸の乙女は正常そのものであるのに、鎧の騎士の反応は、異常としか言いようのないものである。鎧をつけていない十九世紀アメリカのヤンキー 姿に対する乙女の反応は、鎧の騎士に対する彼女の反応と全く異なる。

Up went her hands, and she was turned to stone; her mouth dropped open, her eyes stared wide and timorously, she was the picture of astonished curiosity touched with fear.

(28)

これは、奇異なものは奇異なものとして、驚きの眼を見はるという健全で、自然な反応である。鎧の騎士がこのヤンキーに対してとる反応と全く対照的である。出会う者すべて敵とみなし、長い槍を構えて攻撃し、勝てば武具をはぎ、prisoner にして王の許へ曳行する。このパタンに従う以外に動きのとれない奇形というべきものが、騎士である。Hank は、この騎士を“circus man” だと呼んだり、“asylum” にいる狂人だと思ったり、“iron-clad fool” と罵ったりして、「鎧」への挑戦をこころみる。その挑戦の基本的な理由は、「鎧」が単なる name であり、artificiality にすぎず、reverence を醸成する根源であるということである。

3

この「鎧」と「裸」の contrast は、物語の進行につれて、「忍耐と抑圧」と「激怒と爆発」の contrast へと展開してゆく。この小説には、ダイナマイト等、数多くの「爆発」を表わす象徴的表現がもちこまれている。その中で最も重要なものが、「火山」である。中世英国に人目を避けて芽生える十九世紀の civilization について、こう描かれている。

Unsuspected by this dark land, I had the civilization of the nineteenth century booming under its very nose! It was fenced away from the public view, but there it was, a gigantic and unassailable fact — and to be heard from, yet, if I lived and had luck. There it was, as sure a fact, and a substantial a fact as any serene volcano, standing innocent with its smokeless summit in the blue sky and giving no sign of the rising hell in its bowels. (120)

この青空に噴煙のかげりすら見せず、内部の煮えたぎる溶岩の炎を気どられず、静まりかえった「火山」のイメージを Twain は、巧みに中世における十九世紀 civilization の姿を表現するのに用いている。この内なる火の海は

その civilization を象徴的に表わし、外なる溶岩の壁によって包みこまれてはいるものの、いつ何どき活動を開始し、爆発するかもしれない危険極まりないエネルギー源である。そして、完全に鳴りを静め、活動を停止してしまった「死火山」のイメージは dark land の中世英国を見事に表わしている。

Hank の見るところでは、中世人はすべて誕生から十七才までは「活火山」にとどまるものの、それを超えると、封建社会の噴出する堆積物の下敷きになって、永続的に「死火山」となる。幸うじて、それを免れるのは、女と子供である。Arthur 王との旅で Hank が出くわす “The Small-Pox Hut” の老婆がその「活火山」の一例である。この老婆は、自分の夫の死を聞くと悲しむどころか、勝誇ったような喜びもあらわに、こう言うのである。

What triumph it is to know it! None can harm him, none insult him more. He is in heaven, now, and happy; or if not there, he bides in hell and is content; for in that place he will find neither abbot nor yet bishop. We were boy and girl together; we were man and wife these five and twenty years, and never separated till this day. Think how long that is to live and suffer together. This morning was he out of his mind, and in his fancy we were boy and girl again in the happy fields It was his reward for a cruel life patiently borne. (372)

この irreverence は、そのまま The Church に対する痛烈な批判であり爆発である。死への恐怖に代わる死の喜びは、死の恐怖を教える The Church に対する激怒と爆発を示すものである。子供の場合、この irreverence は、ごく自然に、普通の生活の中に表われる。子供は「死火山」の堆積物に埋もれず、生き生きしている。“Sir Boss” の Hank が Sandy を従えて冒険の旅に出る。その時、民衆の中の大人は皆、“Sir Boss” を見かけると、恭々

しく別れの挨拶をするが、それにひきかえ、町はずれに遊んでいる薄汚い子供たちは、“Oh, what a guy!” と叫んで、馬上の Hank に土くれを投げつける。その余りな違いに呆気にとられた Hank はこう言う。

In my experience boys are the same in all ages. They don't respect anything, they don't care for anything or anybody. They say “Go up, baldhead” to the prophet going his unoffending way in the gray of antiquity; they sass me in the holy gloom of the Middle Ages; and I had seen them act the same way in Buchanan's administration (137)

つまり、子供は、いつの時代であれ、どこの国であれ、天心らんまんて感受性が鋭く、たちどころに理非曲直を明快にし、逡巡しない。また、第四章の Sir Dinadan の古くさくて、面白くもないユーモアに対して、大人と子供とは全く異なる。大人はだれもが、ただ体裁をとりつくろうために、また、周囲の調子に合わせ仲間外れにされないためだけに笑いこける。しかし、子供は面白くないものは面白くないとはっきり態度に表わし、Sir Dinadan のユーモアの陳腐さを笑う。

Everybody laughed at these antiquities — but then they always do; I had noticed that, centuries later. However, of course, the scoffer didn't laugh — I mean the doy. No, he scoffed; there wasn't anything he wouldn't scoff at. He said the most of Sir Dinadan's jokes were rotten and the rest were petrified. (54)

この、いかにも「活火山」然とした子供に対して、大人は、The Church に対して「激怒と爆発」の力を示す気力を完全に失った「死火山」である。この奇妙で、見るも無惨な中世の大人の状態が Hank の眼にはこううつる。

Well, it was a curious country, and full of interest. And the people! They were the quaintest and simplest and trustingest race; why, they were nothing but rabbits. It was pitiful for a person born in a wholesome free atmosphere to listen to their humble and hearty outpourings of loyalty toward their King and Church and nobility; as if they had any more occasion to love and honor King and Church and noble, than a slave has to love and honor the lash, or a dog has to love and honor the stranger that kicks him. (97)

この“rabbits”にひとしい大人たちには、怒り、憎しみ、爆発といった“manhood”¹⁰の要素は微塵もみとめられない。それどころか、さらに、奇妙なことには、その怒り、憎しみ、爆発とは全く真反対の、喜び、愛、抑圧が、それらにとって代っていることである。王、Church、貴族から、どんな仕打ちにあわされようと、彼等の反応はきまっている。その「非道、残虐」のお返しに、民衆はその加害者に対して、「愛と敬意」なる贈り物を捧げる。この完全に倒錯した反応について Hank は繰り返し触れている。こうして、中世封建社会における一般民衆の愚かさが発かれ、それが、封建社会という「鎧」からくる災厄であることが明らかにされる。

この「活火山」の子供と「死火山」の大人とを分ける irreverence について、Twain はこう説明する。

……to my mind a discriminating irreverence is the creator & protector of human liberty — even as that other thing is the creator, nurse, & steadfast protector of all forms of human slavery, bodily & mental.¹¹

更に、irreverence と同義に用いられる disloyalty について、この小説の覚え書きとして Twain の *Notebook* に次の走り書きがみられる。

The first thing I want to teach is disloyalty, till they get used to disusing the word *loyalty* as representing a virtue. This will beget independence — which is loyalty to one's best self and principles, and this is often disloyalty to the general idols and fetishes.¹²

この *human liberty* を生みだし、守ってくれる *irreverence*, *disloyalty* の真価を教え、“*peaceful revolution*” を達成しようというのが、Hank の踏み出す一段階である。そのために行うHank の手だては、Arthur 王社会のすべてに *name* と *substance* を見究め、*reverence*, *loyalty* に値いしないことを明示するというものである。Hank の行う「奇蹟」には、太陽隠蔽、塔爆発、聖泉復活の三つがその主なものである。これら三奇蹟、太陽隠蔽、塔爆破、聖泉復活は一見、いずれも思いつきのなもので、一貫性を欠き、そこになんら *serious* なものがみとめられないという印象をだれしもうけるであらう。しかし、この印象とはうらはらに、その三奇蹟には明白な一貫性がみとめられる。この三奇蹟はいずれも、*civilization* と *nature*, *name* と *substance* のコントラストを含む。これらの三事件が起されなければ、そのままにとどまったであらう「表面」が、これを契機にはぎとられる。この事件によって、“*big man*”の光に眩惑されて見えなかった“*little man*”の存在があばかれるのである。この場合、“*King*”と“*Sir Boss*”，魔術師 *Merlin* と Hank という個別的コントラストがうきぼりにされると同時に、それぞれの個人に *name* と *substance* の両面のあることがむき出しにされる。たとえば、*King Arthur* について Hank はこう語る。

Well, I liked the king, and as King I respected him—respected the office ; at least respected it as much as I was capable of respecting any unearned supremacy ; but as *men* I looked down upon him and his nobles—privately. (103)

ここにはっきりと、King Arthur の二面，“King”なる「衣裳」と、その中味の「人間」Arthur とが分けられている。このことは、Hank 自身についても同じである。一般民衆の眼に映ずる自らの姿を鋭く分析して、こう述べる。

The way I was looked upon was odd, but it was natural. You know how the keeper and the public regard the elephant in the menagerie: well, that is the idea. They are full of admiration of his vast bulk and his prodigious strength; they speak with pride of the fact that he can do a hundred marvels which are far and away beyond their own powers; and they speak with the same pride of the fact that in his wrath he is able to drive a thousand men before him. But does that make him one of *them*? No; the raggest tramp in the pit would smile at the idea... Well, to the King, the nobles, and all the nation, down to the very slaves and tramps, I was just that kind of an elephant, and nothing more. I was admired, also feared; but it was as an animal is admired and feared. The animal is not revered, neither was I; I was not even respected.

(98-100)

“Sir Boss”なる肩書は、同じ肩書であっても“King”なる肩書とは全く異なるというのである。“King”は、血統から得られる肩書であるが、“Sir Boss”は、“accomplishment”によって得られたものである。一般に民衆から「尊敬」を集めるのは、その血統による「肩書」であって、“accomplishment”による「肩書」ではない。Hank がうけるのは、「尊敬」ではなく「畏れ」、「恐怖」である。彼のもつ“elephant”的な力に対して払われるものにしかすぎない。Merlin についても同様で、“great magician”の「衣裳」の下にかくれた“that cheap old humbug”の正体が発かれる。

この“stripping”に加えて、Hank は、この disloyalty, irreverence の力を甦えらせ、認識させるために、全く対照的な二回の旅に出る。その一つは、「鎧」を身にまとっての旅で、“Sir Boss”の肩書をもっての旅である。他の一つは、「鎧」を身につけない「裸」の旅で、“Sir Boss”の肩書をかくしての旅である。前のは、Sandy との旅で、Don Quixote¹³を思いださせる、明るい気分での諸国遍歴の旅であるが、後のは、Arthur 王と共に百姓の姿に扮しての、お忍びの民情視察で、暗い serious な mood の旅である。この「鎧」を着ける側と、「鎧」を着けない側との両面から、中世社会における「鎧」の力の大きさ、残虐性の指摘が巧みになされる。たとえば、Hank は、前の旅において、「鎧」の非実用性について、ポケットのないこと、神経にさわる金属音、太陽熱による炎熱地獄、蟻、虫の襲来といった拷問の苦しみを味い、音をあげた Hank は、“I would never wear armour after the trip.” (153) と決意するに至る。この災厄に見舞われての Hank の言葉はこうである。

All those trying whilst I was frozen and yet in a living fire, as you may say, on account of that swarm of crawlers, that same unanswerable question kept circling and circling through my tired head: How do people stand this miserable armour? How have they managed to stand it all these generations? How can they sleep at night for dreading the tortures of next days? (153)

この外なる鎧のもたらす災厄が、それだけにとどまらず、内なる「鎧」をつくりだし、これにもまして重大な災厄をひきおこすことを、これに続く条りにおいて、こう述べている。

There were two “Reigns of Terror,” if we would but remember it and consider it; the one wrought murder in hot passion, the other

in heartless cold blood ; the one lasted mere months, the other lasted a thousand years ; the one inflicted death upon ten thousand persons, the other upon a hundred millions ; but our shudders are all for the "horrors" of the minor Terror, the momentary Terror, so to speak ; whereas, what is the horror of swift death by the axe, compared with life-long death from hunger, cold, insult, cruelty and heartbreak ? What is swift death by lightning compared with slow death at the stake ?

(157)

「鎧」は、この恐るべき二種類の“Terrors”を誘引するというのである。Hank は後の旅では、Arthur 王の教育係の役をつとめる。ただ、身のこなし、所作、言葉といった外面的な匡正だけにとどまらないで、内なる「鎧」を Arthur 王から剥ぎとることに懸命になる。そして、この努力も、電信電話、新聞、保険の普及と同様、空しいものであることが Hank に徐々にわかってくる。「忍耐と抑圧」による“peaceful revolution”を行うには、余りにも、この中世英国の「鎧」が堅固にして抜きがたいという認識に Hank はやっとここで到達する。ここにおいて Hank は目覚め、全く別の道を歩むほかないことを悟り、こう言う。

I rather wished I had gone some other road. This was not the sort of experience for a statesman to encounter who was planning out a peaceful revolution in his mind. For it could not help bringing up the un-get-aroundable fact that, all gentle cant and philosophising to the contrary notwithstanding, no people in the world ever did achieve their freedom by goody-goody talk and moral suasion : it being immutable law that all revolutions that will succeed, must *begin* in blood, whatever may answer afterward. If history teaches anything, it teaches that.

(242)

この厳しい「革命」の認識が、前の「忍耐と抑圧」の姿勢から、「激怒と爆発」の姿勢への転向を Hank に強いるのである。この転向は、しかし、半面においては、Hank 自身の性格に帰因している。

4

先の Arthur 王治下の英国の中でしばし鳴りを静める近代 civilization を象徴する「活火山」は、そのまま、その civilization をそこにもちこんだ Hank 自身を象徴的に表わしている。すなわち、Arthur 王の中世英国という「静」の世界に19世紀アメリカの機械文明、とりわけ銃火器を専門とするヤンキーの潜入、潜伏は、まさに先の「活火山」の姿である。しかし、その反面、その中世英国の風土になじみ、Arthur 王の宮廷生活を楽しむ別の人格「死火山」がある。言い替えれば、Hank の中に、中世英国の「円卓」騎士世界に参入し順応し、それを支えさえする“Sir Boss”と、その世界に真向から対立し、その崩壊のために骨身をけずる「ヤンキー」とが共存している。いわばジキル・ハイド的な二重人格を Hank はかねそなえている。¹⁴ これは、もちろん、本来 Hank にそなわっていたものではなく、“Sir Boss”の称号と同じく、Arthur 王治下の英国への参入がそのきっかけとなって生じたものである。この経緯は、“The Stranger’s History”という Hankの自己紹介によって明らかにされる。Hank は19世紀アメリカで武器工場を経営し、大勢の工員を傭い入れて経営者の生活を送るうちに、Hercules と異名をとる大力男と格闘することになり、脳天に一撃をうけ、失神してしまう。この失神状態は、Hank にとっては、ほんの束の間のことに思われるが実は13世紀も時が逆に経過しており、場所は有名な Arthur 王の宮廷だとわかる。この事件が、紛れなく、Hank の一大転換点となる。これは、現実世界から幻想世界へ、明るい世界から暗黒世界へ、意識世界から無意識世界へ、civilization の世界から nature の世界へ、の転換を示すものである。とりわけ、ここで見落してはならないのは、Hank 自身の性格上の転換、ヤンキーから“Sir

Boss”への転換である。

この変身は、Hankの身にまとう衣服の変化によって読者に示される。つまり、HankがSir Kayの prisoner となり、Arthur王宮廷へ連行される時に着ていたヤンキー服は、会う人々の間で注視の的となり、見せものになる。そして、Hankは牢獄に入れられる前に、そのヤンキー服は“perilous clothes”だとされ、恐れられ、脱がされてしまう。殆んど裸同然の姿で牢生活を過した後、日蝕の奇蹟を考えだして成功し、幽囚、死刑の身から一躍、“Sir Boss”の称号を獲得し、きらびやかな宮廷服を身にまとう。この時、Hankはこう洩らす。

My raiment was of silks and velvets and cloth of gold, and by consequence was very showy, also uncomfortable. But habit would soon reconcile me to my clothes ; I was aware of that. (83)

一時の不快さもなくなり、このArthur王宮廷の豪華な宮廷服へ順応してゆくことは、Hank本来の“practical”な“a Yankee of the Yankees”が影をひそめてしまい、その代わりとして、sentimentalな“Sir Boss”の光が眩しく輝きはじめることを示している。さらにSandyとの旅で、Hankが甲冑、鎧まで身につけるということは、彼本来のヤンキーとしてのnatureが消滅しかかったことを表わすものである。

しかし、Hankは、“Sir Boss”という、いわば「仮り着」の生活を暫く過しているうちに、Hank本来のヤンキーとしての自己にたちかえることがある。

The thing that would have best suited the circus side of my nature would have been to resign the Boss-ship and get up an insurrection and turn it into a revolution. . . . (160)

ここに、Arthur王宮廷社会と妥協し、それに順応する“Sir Boss”とは

真反対の革命家、ヤンキーの一面がのぞく。“Sir Boss”なる「衣裳」を脱ぎ棄て、「暴動」を起し、それを「革命」にまで発展させるという Hank の“circus side”こそ、彼本来の Yankeeism である。

これら相矛盾する二面、「妥協」の“Sir Boss”と「挑戦」のヤンキーとは、時には重なり合い、時には相前後して、現われる。しかし、大きく小説全体から見た場合、前38章が、「妥協」の“Sir Boss”を記すのに対して、後の4章が、「挑戦」するヤンキーを扱うものである。ただ、その態度が「妥協」であれ、「挑戦」であれ、Hank の目指す敵は定まっている。

In two or three little centuries it (the Church) has converted a nation of men to a nation of worms. Before the day of the Church's supremacy in the world, men were men, and held their heads up, and had a man's pride and spirit and independence; and what of greatness and position a person got, he got mainly by achievement, not by birth. But then the Church came to the front, with an axe to grind; and she was wise, subtle, and knew more than one way to skin a cat — or a nation; she invented “divine right of kings”, and propped it all around, brick by brick, with the Beatitudes — wrenching them from their good purpose to make them fortify an evil one; she preached (to the commoner,) humility, obedience to superiors, the beauty of self-sacrifice; she preached (to the commoner,) meekness under insult; preached (still to the commoner, always to the commoner,) patience, meanness of spirit, non-resistance under oppression; and she introduced heritable ranks and aristocracies, and taught all the Christian populations of the earth to bow down to them and worship them. (100-1)

このように、“A nation of men”を“A nation of worms”に変えた

The Roman Catholic Church こそが、諸悪の根元であり、打倒すべき唯一の敵であると秘かに Hank は確信しながらも、「妥協」の“Sir Boss”の面が「挑戦」のヤンキーの面より優勢で、実行に踏み切れない。この大敵を前にすると、“Sir Boss”の方は、先ず real なものとしてとらえてしまわないうちは、動けない弱さをもっている。

The mere knowledge of a fact is pale ; but when you come to *realize* your fact, it takes on color. It is all the difference between hearing of a man being stabbed to the heart, and seeing it done.

(71)

この「知識」の段階から、自らの「体得」の段階に昇華した時、始めて行動に移れるのである。この逡巡は、Hank が Arthur 王と共に奴隷の身分に落ち、逃亡を画策する Hank の次の心境によく表現されている。

I was ready and willing to get free, now . . . Liberty would be worth any cost that might be put upon it now. I set about a plan and was straightway charmed with it. It would require time, yes, and patience, too, a great deal of both.

(458)

Merlin が奇蹟を行う前に必ず時間をかけて、呪文、祈禱を行うように、“Sir Boss” もまた、彼流儀の「奇蹟」を行う前に「時間」と「忍耐」とを必要とする。“I am afraid of the Church”, “it would be poor wisdom to antagonize the Church” という“Sir Boss”の恐怖と分別とが強く働いて、“great magician”の名にも拘らず、まるで「死火山」のように鳴りをひそめなければならない。これが、“Sir Boss”のいわゆる“peaceful revolution”の段階である。

5

The Roman Catholic Church の下す「破門」に端を発する最後の凄惨な戦いは、“We were in a trap, you see—a trap of our own making.” (570) に示されるように、Hank の「外なる戦い」と言うより、Hank の「内なる戦い」である。つまり、The Church 側の寄せくる騎士達を相手にする戦いは、Hank 側のガトリング銃を始めとする近代武器によって、当然前もって勝敗の行方は定っている。問題はむしろ「内なる戦い」である。つまり、味方同志の中で、そして、Hank 自身の中で、始まる陰惨な戦いは、Hank, Clarence の想像を絶するものとなる。

この「破門」の威力は Hank の想像を超えるもので、Hank がそれまでに営々として築きあげた一切のものが消滅する。折角にして愛が芽生え、結婚し、一子をもうけた Hank と Sandy との仲さえもが先づ無残にひき割かれ、それを手始めに次々と Hank と中世英国との連結管が分断されてゆく。

Our navy had suddenly and mysteriously disappeared! Also as suddenly and as mysteriously, the railway and telegraph and telephone service ceased, the men all deserted, poles were cut down, the Church laid a ban upon the electric light! (539-540)

直接、ガトリング銃を手にして戦う若き戦士についても、同じ脱落現象が目立ち、14才から17才までの少年52人だけが Hank と Clarence の許にとどまるのみである。この経過について Clarence は Hank にこう報告する。

Because all the others were born in an atmosphere of superstition and reared in it. It is in their blood and bones. We imagined we had educated it out of them; they thought so, too; the Interdict woke them up like a thunderclap! It revealed them to themselves, and it revealed them to me, too. With boys it was different. (540)

ここで、はっきりと、真に The Church を相手に戦うことのできる irreverence の存在と、The Church を前には畏縮して動けない reverence の存在とが分かれる。Arthur 王治下英国に巣喰う「死火山」群と一握りの「活火山」の戦士とが、ここで浮きぼりにされる。しかし、この52人の戦う「精鋭」の中にすら、「ぐらつき」が生じる。彼等は Hank にこう嘆願する。

We have tried to forget what we are—English boys! We have tried to put reason before sentiment, duty before love; our mind approve but our hearts reproach us. While apparently it was only the nobility, only the gentry, only the twenty-five or thirty thousands knights left alive out of the late wars, we were of one mind, and undisturbed by any troubling doubt; each and every one of those fifty-two lads who stand here before you said, “They have chosen—it is their affair.” But think! —the matter is altered — *all England is marching against us!* Oh, sir, consider! —reflect! —these people are our people, they are born of our bone, flesh of our flesh, we love them —do not ask us to destroy our nation! (552)

この今にもふりかかりそうな戦士52人の内部崩壊に加えて、意外にも、外部の「崩壊」が Hank 等同志を苦境におとしこむ。生きた敵を相手に、彼等は数日の激しい戦いを有利に進めながら、驚いたことには、「死んだ敵」が東の間の勝利者 Hank 達を窮地に追いつこむ。

That swelling bulk was dead men! Our camp was enclosed with a solid wall of the dead — a bulwark, a breastwork, of corpses, you may say. (563-4)

一度倒した筈の敵の群れが、死体から発散する “poisonous air” (407) によって、Hank の同志を次々になぎ倒す。この戦いの “The War of Sand-

belt”なる名称さながらの空しさ、悲惨さである。そして、最後には皮肉なことに、Hank 自身の「内なる戦い」—「妥協」の“Sir Boss”と「挑戦」のヤンキーとの戦い—となる。Hank が Merlin の洞穴から出て、周囲の戦況を見まわるうちに、助けを求める敵の負傷兵に気づき、手を差し伸べようとする sentimental な“Sir Boss”の面がのぞき、その敵の剣で“Sir Boss”は刺され、洞穴の中へ運びこまれる。これは、Hank の内なる「挑戦」のヤンキーによる「妥協」の“Sir Boss”への一撃である。この言わば同志討ちによって、Hank はこれまで目指してきた、より高い次元へ到達するのである。それは、真の意味での human liberty の世界、Merlin の手によって導かれる Hank 最後の世界、delirium の世界である。それは、「時間」、「空間」、「神」から完全に解放された理想境である。Hank の中には、ただ、妻 Sandy と愛児 Hello-Central への思慕の情だけで、凡ゆるものから解放された至上悦楽の境地である。長い間、極端な contrast の中であって放浪の苦しみを味いつづけた Hank に対する当然の報酬である。Arthur 王が、「時間」と「空間」の束縛のない Avallon の島¹⁵で息をひきとり、「過去の王にして未来の王」と墓石に刻まれたと同様に、Hank は、delirium なる「Avallon の島」で、妻子の名を幸福そうに呟きながら息をひきとる。この delirium の世界こそ、Hank の求めに求めた「聖杯」である。

Cox 教授は、この小説を *Huckleberry Fin* と較べて、次のように言っている。

A Connecticut Yankee sounds bigger than *Huckleberry Finn*. It makes more noise ; it seems more aspiring ; it is much more liberal ; it exposes the evil as well as the folly of man and his institutions.¹⁶

これは、たしかに的をついた評言である。これを、もしも、この小論の論旨にそって敷衍することが許されるならば、*A Connecticut Yankee* は、「生」と「死」の合一を目指した小説だと言うことができるだろう。

I think we never become really and genuinely our entire and honest selves until we are dead.... People ought to start dead....¹⁷

Twain は、人間は「死」から出発して始めて真の「生」に到達できる、と考えた。「生」から出発する人間は、自分ではそれを「生」だと思いうにしても、所詮、それは「死」にほかならない。人間は、生まれると直ぐに「生」の prisoner となる。そして、真に生きた人間は、その prisoner の境遇から逃れ、挑戦の旅に旅立ち、自分なりの「聖杯探求」につとめる。Hank はまさに、こういう prisoner であり、pilgrim である。

注

1 H. N. Smith and W. M. Gibson (eds.), *Mark Twain-Howells Letters*(Cambridge, Harvard University Press, 1960), pp. 610-611.

2 これは Twain の持論で、次が参考になる。

“perhaps the most warping & narrowing habit a man can acquire is that of encouraging his inborn disposition to look at only one side of a thing. If persisted in, a time will come when the thing *has* only one side for him. If he approves it, it is wholly beautiful & flawless; if he disapproves it, is utterly ugly & thickspotted with faults. Yet in truth, few things are entirely bad or perfectly good ...” (MTP. This two-page manuscript is among the The American Claimant Papers in Box 14.)

3 D. Wecter(ed.), *Mark Twain To Mrs. Fairbanks* (San Marino, Huntington Library, 1949), pp. 257-8.

4 Twain の旅への言及は多いが、一貫性がある。その一例が次である。

“It rubs out a multitude of his old unworthy biases and prejudices. It aids his religion, for it enlarges his charity and his benevolence, it broadens his views of men and things; it deepens his generosity and his compassion for the failings and the short-comings of his fellow-creatures. Contact with men of various nations and many creeds teaches him that there are *other* people in the world besides his little clique, and other opinions as worthy of attention and respect as his own. (A. B. Paine, *Mark Twain's Speeches* [New York, Harper & Brothers, 1910], pp. 29-30)

5 1898年8月16日付の Vienna から Howells に宛てた手紙の中で、Twain は「書き

出し」の重要性を次のように言っている。

Speaking of the ill luck of starting a piece of literary work wrong — & again — & again; always aware that there *is* a way, if you could only think it out, which would make the thing slide effortless from the pen — the one right way, the sole form for *you*, the other forms being for men whose *line* those forms are, or who are capabler than yourself; I've had no end of experience in that (maybe I am the only one — let us hope so). (H. N. Smith and W. M. Gibson, *Mark Twain-Howells Letters*, p. 675)

6 Hamlin Hill(ed.), *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (Scranton, Chandler Publishing Company, 1963), p. 18. 以下、本テキストの引用は各引用文末尾の()内に頁数を示すのみとする。

7 *Joan Of Arc* の時と同じように、Twain が中世に強い感銘をうけ、そのことが彼をこの創作に踏みきらせた。

“Fall of '84 — while Cable & I were giving readings Cable got a *Morte d'Arthur* & gave it me to read. I began to make notes in my head for a book. Nov. 11, '86 I read the first chapter (all that was then written), at Governor's Island & closed the reading with an outline of the probable contents of the future book (*The Yankee at Arthur's Court* in '87 & '88, published it in December '89 ... Nov. 19 '89 SLC” (NOTEBOOK # 23, 11)

その影響度については次の論文が詳しい。

R. H. Wilson, “Malory in *The Connecticut Yankee*,” *University of Texas Studies In English*, Volume 27 : 1 (June, 1948).

A. B. Paine によると、Cable によって手渡された Malory の *The Morte d'Arthur* は、“little green cloth-book”で、Strachey の “Glove” edition だったという。

8 参考文献としては次の書を用いた。清水あや著「アーサー王伝説研究」(研究社, 昭和41), 厨川文雄・厨川圭子訳・解説「アーサーの死」(抄)(筑摩書房版『中世文学集』所収, 昭和41), Sir Thomas Malory, *The Morte Darthur : An Abridgment with an Introduction* by Charles R. Sanders and Charles E. Ward (New York, Appleton-Century-Crofts, 1940).

9 ここにいう nature とは、「本然のもの」、「すべてに内在する実体」をいう。「すべてから解放され、純粹にして無垢なもの」の意である。

10 この語は Thomas Carlyle の用語に由来する。Carlyle の影響は大きい。“S. L. Clemens, 1888”と書き入れのある *Sartor, Past and Present, On Heroes and Hero-Worship* の三書が Twain の蔵書の中にある。とりわけ, *French Revolution* は Twain の最上の愛読書で, 1871年版の序文の中で, これを “one of the greatest that ever

flowed from a pen”と絶賛した。Sartier からの影響は、1897年の8月か9月かの *Notebooks* 中の次の引用に明らかである。“What is civilization? ... What is back of all political powers (thrones, popedoms, etc.)? Clothes,” (NBK 325 I p. 28).

11. Mark Twain Papers, #102a.

12. A. B. Paine, ed., *Mark Twain's Notebook* (New York, 1935) p. 199.

13. Twain が *Don Quixote* から強い影響をうけたことは多くの批評家、伝記学者が指摘している。たとえば、Baetzhold は次のように言う。He applauds Cervantes' having “swept the world's admiration for medieval chivalry-silliness out of existence,” and bemoans the fact that Scott had restored the romantic spirit which in turn had stifled progress in the American South. (Howard G. Baetzhold, *Mark Twain & John Bull* [Indiana University Press, 1970] p. 283)

14. Hank の二面性について、Twain は、この小説の挿し絵を書いた Dan Beard に次のように述べた。

“The Yankee of mine ... is a perfect ignoramus; he is a boss of a machine shop, he could build a locomotive or a Colt's revolver, he can put up and run a telegraph line, but he's an ignoramus nevertheless.”

Howard Taylor がこの小説の劇化を試みた時、Twain は Hank の一面のみをとらえたと非難した。

“He has captured but one side of the Yankee's character — his rude animal side, his circus side; the good heart and the high intent are left out of him.” (D. Wecter, ed., (New York, 1949), p. 275).

15. これについては清水あや著「アーサー王伝説研究」p. 331 を参照のこと。

16. James M. Cox, *Mark Twain, The Fate of Humor* (New Jersey, Princeton University Press, 1966), p. 201.

17. Bernard De Voto(ed.), *Mark Twain in Eruption* (Harper & Brothers, 1940), p. 203.